
だけど好きな人

由樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だけど好きな人

【Nコード】

N1176A

【作者名】

由樹

【あらすじ】

高校生カップル、紅と翔。付き合って一年以上経つ二人ですが、実は絶対的な力関係があつて――。こんな二人の恋がどう動くか、そして何が待ち受けているのか…。

#1 気まぐれ（前書き）

恋愛っていうのは、

お互いの気持ち釣りがあって始めて成り立つものだと思ってた。

だってそうじゃないと、

重いか

物足りないとか

色々不都合が生じるでしょ？

そう…生じるはずなんだ。

#1 気まぐれ

「よ、お待たせ」

「…私も、今来たところだから」

「そっか」

満足げに笑う彼―皆瀬 翔が、私―斎藤 紅^{モミ}にゆっくりと歩み寄って来る。

…待ち合わせ時間がとうに過ぎた二時間後に。

「どこ行く？」

「ん？ 映画…だね。チケットちゃんと取ったんだよ」
もしかして……。

「俺、映画って気分じゃないや。ボーリングだなっ」
やっぱりっ！

「ちょっと待って！ 私今日スカートだし…。ボーリングはやめない？」
「何言ってるんだよ。早く行くぞ」

私の手を握り、ぐいぐい引っ張る。

ああもう……。

予定通りに行動することが、一回でもあった？

どうしてそうやって、私を困らすの。

…私があなただを、嫌いになるはずないって思ってる？

そんなわけじゃ…あるけど……。

自己中なあなたなのに、ダメ、嫌いになんかなれないよ。

いつまで経ってもきつとこの力関係は変わらない。

だって私はあなたに心ごと奪われたから。

昔、あなたにもらった言葉を今もずっと覚えてるから。
それをずっとずっと、信じているから―。

#1 気まぐれ（後書き）

この作品はとてつもなくスローペースで更新していこうと思っています。その分、愛情込めて書きますね。どうぞ、応援よろしく願います。

#2 お気楽者

「悪い、これ訳しといて」

隣のクラスからわざわざやって来た翔は、私に英語のプリントを渡す。

「…宿題？」

「うん。俺、英語訳すって意味ないと思うんだわ。頭の中でいちいち訳さないで、浮かんできくるもんじゃん」

…そうなるのが、大変なのでわ…。

「わかった、やっつくね」

快く引き受ける。翔が私を頼ってくれるなんて、嬉しいもん。

「ん。じゃあ五限目までに」

さつさと去る翔。

はー、颯爽として格好良いなあ…。

「ちょっと、紅?!」

少し怒ったような声が後ろから聞こえてくる。

「ええー何い？」

まだ翔との余韻が消えず、のほほんと振り返る。

「何じゃなくて、まだ皆瀬と付き合ってるの？」

「あ、あっちゃんかあ。もちろんだよ」

幸せオーラ全開らしい私を見て、深い溜め息をつく矢島 愛季子、通称あっちゃん。

「やめろって言ってんじゃん。あいつが紅に会いに来る時は、絶対宿題がらみなんだよ。利用されててヤじゃないの？」

「利用って…頼ってくれてるんだよ。それに翔は私のことが大好きだって、言ってたもん」

あっちゃんが紅のことを、心配してくれてるのはわかってるよ…。だって翔は、貴金属とかたくさん付けてるから見た目がすごくキラキラしてるから。

それに引き換え私は、背が150センチしかなくて、か弱そうに見えるらしいから。でも見た目なんて関係ないの！

男も女も、内面が充実してなきゃいけないんだよ。

翔は、ホントにホントに、素敵な人だもん！

「ええ、皆瀬が紅に好きだって言ったの？想像出来ないんだけど、いかにも嫌そうな顔をするあっちゃん。

「想像なんとしなくてよぉく恥ずかしいなあっ
照れちゃうっ。」

「や…想像出来ないんだってば。聞ってる？」

「はっ。うんっ！」

今日は翔へのお誕生日プレゼントを買いに行こうと思ってるから、それで頭、一杯だよ☆

「…大好きっていつ言われたの？」

「付き合うときだよ。俺、紅みたいなのが大好きなんだ。って」

「…そう」

「そう！はぁー今でも鮮明に思い出せるよう…」
幸せ。

「あっ、大変だあっちゃん！！」

我に返った私。

「どした？」

「翔の宿題、やってなかった！もおすぐお昼休み終っちゃうっ」

「それがみいの、選んだ道なのね」

苦笑いしながらあっちゃんは、宿題を手伝ってくれました。

#2 お気楽者（後書き）

これからもっと、紅の吞気っぷりを出して行こうと思います。後半からは、そうもしてられないと思いますけどねf^_^；

#3 お買い物

「俺今日急ぐから、一人で帰って」

帰り際に教室に來た翔が、言う。

「はあい、わかった。また明日ね」

「ん」

走って行っちゃった。

というか、いつも翔は水曜日、急いでる。

だからこそあっちゃんと翔のプレゼントを買いに行こうと思ったんだけど。

「ねえあっちゃん」

「うん？」

「翔って水曜だけ、どうして早く帰るのかなあ？」

え？！という大声が後ろから飛んでくる。

「ねえ、理由知らなかったの？！」私の肩を掴み、真剣な顔で目を見てくる。

「う…うん」

「はあっ」

大きく息を吐き出し、肩から手を離す。

「紅は気にならないの？」

「んゝ気にならないって言ったら嘘だけど、付き合ってるからって何でも訊くのはどうかなあって…」

「じゃあ紅は、訊いちゃいけない程大変なことだと思ってるんだ」
…あれ？

「どうなんだろう…わかんなくなってきた」

「そうなんだと思うよ。だから無意識にセーブしてるんだよ」

「…そっかあ。じゃ、明日の帰りに訊いてみよっかなあ」

「そうしなよ」

あっちゃんは、とても可愛い笑顔になる。

これ見てると癒し系だなんて思うよ。

「じゃあ行こうか、お店」

「そうだね！紅、ベルトかウォレットチェーンか…とにかく、いつでも使えるのが欲しいんだっ」

「よし、探してみよ」

§

あっちゃん行き着けのお店三店は雰囲気も、商品も価格も良くて私もこれから沢山来ようって思った。

途中であっちゃんの塾の時間になっちゃって、私一人で探し始めた。

「あ、かっこいいウォレットチェーン発見！」

これ翔に似合うかな。

似合うよね…きつと。

翔のクールなイメージとぴったりだし。

これにしよっかなあ。

「いらっしやいませー、何をお探しですか」

男の人の声。

「あっ、これ買おうかなって思って」

「あ、それは現品限りでねーすぐく人気あって、それしかなかったちゃったんですよ」

「あっ、そうなんですか？」

店員さんの方に振り返る。

「「あ」」

二人でハモる。

「きゃー俊ちゃんっ」

しゅ…俊ちゃんだっ。

「みい？紅か！！」

あっちゃんも嬉しそう。

「久しぶりいーっ」

と言って、昔のように抱きつく。

「わっ、これも久しぶりっ」

いきなりで驚きながらも抱き返してくる。

自然に体が離れ、紅は両手をきゅっと握りながら話す。

「いつ戻って来たの？」

「先週の日曜」

「すぐ教えてくれたら良かったのにっ。今どこ住んでるの？おじさんお婆さんは？？」

「あっ、ヤバイよ、みい」

「え？」

「俺バイト中だから…。」

レジにいる人がちらちら見てくる。

「ごめん…」

「や、平気。ウォレットチェーン買うの？」

「あ…うんっ。プレゼント用にしてください☆」

「かしこまりました。みい、俺もうすぐ上がるから待てない？話をう」

「うん、待つ待つ」

「良かった。今日は良い日だな」

「ホントだねっ」

ウォレットチェーンを包んでもらって、近くの本屋さんで時間を潰すことにしました。

#4 幼なじみ

「お待たせ」

「俊ちゃん」

本屋で色んな雑誌を立ち読みしてたら、あっという間に時間が過ぎちゃった。

「お茶飲むか。公園でもワックでもどこでも良いけど」

「あー紅、ケーキ食べたいなあ。スタパ入ろうよ」

紅茶ケーキが食べたいのだ☆

「紅、昔から甘いのが好きだったもんな」

「そう！今も健在なの」

「わかった。じゃあ、行こう」

ふっ、と笑って俊ちゃんが本屋を出る。

背中、すごく大きくなったなあ…。

§

「ねえ俊ちゃんー今日夕飯食べに家おいでよ」

もっともっと、たくさん一緒にいたいっ。

「いやいや、まだカナダから帰ってきたことも知らせてないから…。
ちゃんと親と挨拶に行くからさ」

うう…。

なんでそんな、しっかりしちゃってるの。

「そんなこと気にしなくて良いよ！今更じゃん！」

「んー俺も、みいん家は行きたいけど…」

「よしっ決まり！！私、お母さんに電話するから、俊ちゃんも家に電話して？」

善は急げ！！って言うよね。

「もしもしママ、紅だけど。紅だよ！今俊ちゃんという、今日ご飯
食べに来て良いでしょ？」

いつもより早口で伝える。

慣れないことはしちゃダメだね…。

何言ってるのか自分でもわかんなくなっちゃった。

俊ちゃんはその見て笑ってるし…。

紅なりに精一杯やってるのにつ。

「紅、俊ちゃんって昔お隣さんだった中山さんの？」

「そうだよ、先週に帰って来たんだって。ショップでバイトしてたの」

「……あら！！それは大変、電話替わってよ」

「良いよ」

ママも俊ちゃんはいいい子だって、言ってたっけ。
家族ぐるみで仲良しだったもんね。

「俊ちゃん、ママが替わってって。はい」
携帯を渡す。

「ん、ありがとう」

すぐに受取り、

「おばさんお久しぶりです、俊です」

「あらあゝ随分素敵な声になっちゃって。俊ちゃん、今日家にいらつしいよ。俊ちゃんのお母さんともお話したいわ」

「じゃあ…お言葉に甘えます。まだちゃんと挨拶もせずにすみませ
ん」

「そんな水臭いこと言わないの。じゃあ今からおいでね。あ、お母
さんにお電話したいから番号教えてちょうだい」

「あ、はい…」

ガサゴソと鞆の中をあさり、メモを取り出す俊ちゃん。

「えーと、5490-0000です」

「はいありがとう。じゃあまた後でね」
ピッ

「今から紅の家に向かってってさ」

「うわぁーい！嬉しいっ」

美味しいケーキ食べれたし、俊ちゃんと会えたし。今日は最高の日

だ
な
あ
…
☆

#5 和氣相合

「こっちこっち☆」

辺りが薄暗くなり始めた午後六時。

あたしと俊ちゃんは、あたしの家に向かった。

「あー道、覚えてるわ。この辺あんま変わってないんだな」

「えっ、そう？」

俊ちゃんの方に振り返り、立ち止まる。

「角の酒屋さんはお店閉めちゃったし、お花畑は駐車場になっちゃったんだよ」

「え…花畑って、二人でよくタンポポの綿毛飛ばした…？」

「うん、それ！」

俊ちゃんは顔をしかめ、少し哀しそうな顔をする。

「そっか…。よく遊んだよなー。あまりにも紅が変わってないから、気付かなかった」

「うんっ？待って俊ちゃんっ。紅はすごく大人になってるけど！」

気づてならないわ。紅はもう、いっちよまえなんだから。

「ええ、そうなの？化粧はちよっとしてるみたいだけど…中身はあのまんまじゃん」

楽しそうに言う俊ちゃん。

「中身も成長してるもん。酸いも甘いも知ってるっ」

「ぶっ。みい、真剣すぎ。酸いも甘いもって、お前は甘すぎだから」
ケラケラ笑う。

私もつられて笑う。

俊ちゃん、楽しそうであたしも嬉しくなっちゃうな。

「あ、みいどこ行くんだよ。家はこっちじゃないの？」

俊ちゃんが右を指差す。

え…？

…あ。

「そっ、そおだよ！話すのに夢中になっちゃったっ
びっくりしたあ。思わず行きすぎちゃったよ。」

「みい、ボケすぎ。天然じゃなくて本当にボケてるだろ」

「そんなことないよ。たまたまだよ」

やだなあゝ本当に、昔のまま成長してないのかも…。

…あれ？

くるっ

後ろを見る。

おかしいな…。

誰かに見られてた様な気がするんだけど…。

「みい？早くしろよ」

あたしの家の前に立って、こっちを見る俊ちゃん。

「あ、うん！今行くよ」

…？

なんだったんだろ。

「うわあゝ美味しそっ」「本当。良いだしの臭いがする」

食卓について、目の前のしゃぶしゃぶのだしが入ったお鍋を見る。

今日はお父さんが帰るの遅いんだけど、どうしてもしゃぶしゃぶが
食べたかったから贅沢するんだって。

俊ちゃん達が来たから丁度良かったな。

「紅ちゃんもすっかりきれいになって。良いわねえ」

俊ちゃんのお母さんが褒めてくれる。

「わっ。嬉しい☆ありがとうございますっ。でも、俊ちゃんのお母
さんは相変わらずきれいですよ。ママとは違うなあ」

俊ちゃんのお母さんは、モデル体型なの。

細くて、小顔、足長。

おまけに胸もあるんだから言うことないよ。本当に、美人さんなん
だ。

私のお母さんは、あたしと同じでちっちゃくて、全体的に丸い感じ。

太ってはないと思うけどね。

「もう、褒めたって何も出ないわよおー」

俊ちゃんのお母さんが照れる。可愛い。

「紅、響香と私と一緒に比べちゃだめでしょ？私の悪さが余計引き立っちゃうじゃない」

冗談めかしてママが言う。

そして、俊ちゃんのお母さん―響香さんが、まあ何言ってるの。

春菜は本当に癒し系なんだから…、と褒める。

なんだか懐かしいな。

昔も冗談を言い合って、皆で楽しくお喋りしたっけ。

俊ちゃん達が帰って来てくれて本当に良かった！

そして、あたしは誰かの視線のことなんてすっかり忘れて楽しんだのでした。

#5 和気相合（後書き）

紅と俊の昔の光景や、今の仲の良さなどわかってきたのではないかなあと思います。／皆さん、評価や感想どうもありがとうございます。とても嬉しいです。これから応援よろしくお願いします（＾－＾）V

#6 恋の矛盾

「昨日、何かしてた？」

学校に着くなり、私の教室のドアの前で仁王立ちになって訊いてくる翔。教室に入れないんだけど…。「何かって…なんだろう。別にないよ」

俊ちゃんとの再会は特別なことだったけど。

翔は自分に関係無いことには興味持たない人だから、言う必要ないよね。そんな所もクールで好きなんだなあ。

「あーそう。なら良い」

むすっとした顔で言い放つ。

何何？ 気にいらないことでもあったのかな。イヤな思いをしたのかな…。

「翔、何かあったの？…疲れてるとか？」

「別に。じゃあな」

えっ。

翔がわざわざ私のクラスに来たのに、なんでもないワケないと思うけど…。

「わかった、またね。放課後、そっちに行くから」

いつも学校が終わると、あたしは翔と一緒に帰る為に会いに行く。

隣のクラスだし、休み時間によく遊びにも行く。

でも翔は昨日みたいな宿題があるときとかにしか来ないんだ。

だからこそ、今日みたいに朝から来るなんてただ事じゃないと思ったんだけど。

「あ、紅にもう一回だけ言っとく」

翔が真顔であたしを見つめる。整った顔立ちで、深い瞳に吸い込まれそう。

「俺、嘔吐きは大嫌いだから」

……え？

ズキッ厳しい目。

鋭い視線。

いつも私のペースを乱しながらも楽しそうに輝く目とは違う。別物。なんで今更、わかりきったことを言うの？

戸惑いながら心の中で聞いてみる。もちろん、届くわけではない。あんな目で見られたくない。

でも私が何をした？

わかんない…。

バカだから気付いてないのかな。

視野が狭くて、周りに気を使えていないからわからないのかな。

翔の言葉を

「え？」

って疑問に思うことがある。

別に気にしてるわけじゃないけど、よく考えたら私と翔はアイコンタクトなんかが出来る程繋がっているとは思えないよ。

もう二年も付き合っているのに。

なんでだろ。

翔を好きって気持ちは誰にも負けないし、翔もあたしを好きって言うてくれた。

…もう、二年前になるわけだけど。

『好き』って、一度しか言われたことがない。でも言葉にしなくたって通じてると信じているよ。愛することは信じてることだと言うし。翔もそうでしょ？言葉にしなくても伝わってるって、私を信じてくれてるんだよね…？

気持ちは形にならないから、伝わってるかどうか目に見えないけど、私はずっとそう思ってるよ。

……あれ？

わかんなくなってきた…。

気持ちは見えないけど、私は確かに翔が大好きで、だからお互いに

信じあってるんだって信じてる。
合ってるよね。

だから、あたしが、翔が自分のことをどう思ってるか不安になるなら翔を信じてないことになるんだ。

：理屈はわかる。すっごくわかる。

でも何かが違う。繋がってるっていう実感がないのは、信頼関係がないから…？

私は翔が大好き。

翔も昔、私を好きだと言ってくれた。それは真実。

でも今は、態度を見る限りはつきりそうなのかって自信は持てない。

昨日までは不安も、疑問も持ってなかったのに、どうしていきなり？

私の心の中で、何かが矛盾してる。

もやもやする…。

私が今まで信じてきたものの根拠って何？

信じることに理由を求めちゃ行けないとも思うけど…。

だめだ。

本気でごちゃごちゃしてきた。

元々あたしは考えるのが苦手なんだよ。

思ったこと、感じたことそのまま生きてきたから。

慣れないことはしちゃいけないよ…。

昨日思ったばかりなのに。

今、ぐちゃぐちゃ悩んでも仕方ないよね。

とにかく、様子を見てみよう。

#6 恋の矛盾（後書き）

『だけど好きな人』は、賛否両論別れる作品となって参りました。今回の話は、紅が少し疑問を抱き始め、ややこしくなってしまうAへへへ；これから上達して行きたいので、アドバイス・批評等々よろしくお願いします。感想くださった皆様、有難うございました☆

#7 不安な風

「どおしたら良いの…っ」

教室で、あっちゃんの机に両腕を置き、その上に右頬を乗せる。

昨日：翔があたしによくわからないキツイことを言った日、放課後に翔のクラスに行ったらもう姿がなくて。

授業終了の鐘が鳴ったと同時に教室から出て行った、って友達から聞いた。

「紅、なんかしちやったのかなあ…？」

わけがわからないよ！

意味が不明だよ！

「紅…：理由がわかんないなら訊いてみるしかないんじゃない」

「うん…：そおなんだけどね、紅は自分で気付けないのが悔しいんだ。大好きな翔のことなのに…」

じわ……

うわっ、泣きそう。

ごしごし

さりげなく腕で拭く。泣いてるトコなんか、誰にも見られたくないよ…。

「そっか…。それもわかるけどね。紅がこんなに落ちるなんて初めてじゃない？皆瀬、何考えてんだろ」

私ではなく翔に少し苛ついているようなあっちゃんは、そう言いながらあたしの頭をぽんぽん叩いてくれる。

「あっちゃん、大好き」

ぽつりと呟く。

「ありがと。紅は充分いい子なんだから、我慢しない方が良いよ。

私で良かったらなんでも聞くから」

「うん…：ありがとう」

嬉しい。

すごく嬉しい。

あっちゃんはやっぱり、すごく大切な友達。

あっちゃんがいて良かった。

「とにかく今日も家でしっかり考えてくるね。また相談するよ」

「うん。でもあんま考え込まない方が良いよ。じゃ……また明日ね」

「うんっ」

笑顔を作ってみる。

自分でも、顔が怖張ってるのがわかるよ。

あっちゃんはとても心配そうに、ゆっくりと帰って行った。

ふう……

「私も、帰らなきゃ」

「あっ、俊ちゃんっ」

丁度私の家に来る途中だったらしく、歩道を歩いている俊ちゃん。

「紅。俺、男子校に行くことになっちゃったんだけど」

家の前に着いたところで俊ちゃんがあたしに言う。

「男子校にしたの?? 紅の学校にすれば良かったのに……」

なあんだ。

一緒に学校行けると思ったのにな。

「色々編入試験受けたんだけど、一番良いトコに運良く入れたからさ」

ははっ、と軽く笑う俊ちゃん。

「……もう。紅は俊ちゃんと一緒に良かったのに」

頬を膨らましてみる。

ダダこねてる子供みたいだけど……

「紅んとも良かったけど、みいとは学校じゃなくても会えるし。学校で“俊ちゃん”とか言われたら恥ずかしいしさ」

「俊ちゃんって言うくらい良いじゃん……。分からず屋」
イライラする。

なんで俊ちゃんは紅のトコに来ないの？

楽しみにしてたのに。

「みい？どした、今日ちよつといつもと違う」

「なんともないよ。紅は元気ー」

言いながら目を反らして、うつ向いちゃう。

「みい……俺に話せるなら、話してみ？ラクになれるかもしれないんだから」

なっ…、

「なんでわかるの…？紅これでも隠してるんだよ」

隠し事も出来ない程わかりやすい？透けてる？…カッコ悪いじゃない。

「隠さなくて良い。俺、紅のこと昔から知ってるから…お節介かもしれないけど、心配になるんだ」

そつと俊ちゃんの間を見る。

……優しい目。

昔と変わってない目。

「ありがとう…」

#7 不安な風（後書き）

更新、遅れました。待つてくださる読者様、いらっしやいましたらごめんなさい。学生の身なので定期テスト中なんです…。なんて言い訳しちゃ駄目ですね。良かったらこれからも応援してください☆ここまで読んでくださって有り難うございました。

#8 優しい人

俊ちゃんが、私の部屋で話を聞いてくれることになった。

「さて：ゆっくりで良いよ。話してみ？」

心配そうに、だけど優しく包み込むような眼差しであたしを見つめてくれる。

懐かしいな…。

昔、あたしが一人で迷子になって泣いてるときも、俊ちゃんが見つけてくれたっけ。

同じように優しい目で、泣くな、大丈夫だよって言ってくれた。安心して、余計泣いちゃったんだけど。

「俊ちゃんとかうやって話すの、何年ぶりかなあ…？」

自分のことを心の底から心配してくれる友達がいるって、すごく幸せなことなんだね。

翔のことで、あたしらしくない程悩んでるみたいだけど…今は少し嬉しい気分。

「俺が引越したの小六になるときだったから、かれこれ五年か五年…。」

あの頃と変わらない関係でいられるのもすごく大切なことだよ…。俊ちゃんはおつきくなっただし、がっちりした。

けど優しさは変わってないもんね。良いなあ…幼馴染みって…。

「…紅？なんか和んでない？」

不思議そうに、そして不安そうにあたしの顔を見つめる。あつ…。ほんとだよ、のほほんとしちゃった。

「ごめんね、なんか幸せ感じちゃって」
へらへら笑っちゃうあたし。

「ったく、みいはのんびりしてるな。悩みあるんだろ？」
「うんっ。俊ちゃんに聞いてほしいの」

ふっ、と俊ちゃんは笑って、

「うん。来い」

冗談めかして言ってくれる。

「ん…。あのね、翔がわからないこと言うの」

ふう…

言っちゃった。

でも俊ちゃんなら男心がわかるだろうし、何かに気付くかもだよね。

「えーと、訊いて良い？」

少し困惑した顔で言ってくる。

「なになに？」

なんでも訊いてっ。

「翔って誰？」

「……え？」

翔って誰って…。

ああそっか！紅、翔のこと話してないんだったっ。

「翔は中二から付き合ってる、今隣のクラスの紅の彼氏だよ☆ほんつとにかっこいいの！」

えへへ、のろけちゃった。

俊ちゃんじゃなきゃこんなこと言えないもん。

自慢してるみたいに思われたらいやだもんね。

「……俊ちゃん…？」

いきなりうつ向き、無言になる俊ちゃん。

さっきまで元気にあたしを励まそうとしてくれてたのに。

「あーああ、ごめん。何、そんな前から彼氏いたんだ」

俊ちゃんが笑う。とても引きつった顔で。

「うん。…どうしたの、俊ちゃん。顔がなんかこわばってる」

俊ちゃんはびくつと体を揺らし、

「そっかな。そんなことはないよ。俺、その翔ってやつのこと知らないし…ごめん、力になれないや」

「あっ、うん…」

どうしたの。

どうしちゃったの、俊ちゃん。

また私は人にいやな思いをさせた…？

いつの間にか、気付かないうちに。

「ほんとごめんな。今日は帰るから、またなんかあったらちゃんと相談に乗る。えーと…なんか今日、体調悪いかもだからさ」

また引きつった顔。

「大丈夫？家まで送る」

「いい。すぐだし、帰りの紅の方が危ないから」

「うん。わかった。じゃあ変な人とか車に気をつけてね」

「ありがと。またな」

「バイバイ」

俊ちゃんは張り付いた笑顔を残して家に帰っていった。

もう仕方ない。

意地張ったってだめだね。明日、翔に訊きに行く。絶対にわけを知りたいもん。

#8 優しい人（後書き）

主人公、紅の一人称が紅だったりあたしだったり私だったりします。実際その時の気分によって自分の呼び方って変わるなあ：なんて思ったので意図的にそうしてみています。こんな感じの細かいことにこだわるのが好きなんですよ。（笑）

#9 話し合い

「おーす」

軽く右手を挙げ、軽やかに友達と挨拶をする翔。だんだんと教室に近付いてくる。

「おーす……。は？」

翔のクラスの前で、気持ち仁王立ちになり待ち構える私。

翔は一瞬驚いた顔をし、すぐに表情を変える。

「お前、何やってんの。邪魔なだけだ」

ビクッ

まだそんなに冷たい目をしてるの…。

でもここで怯んで、避けたりしたら意味がない。

翔にわけを訊くしか、解決する方法はないんだから。

「おはよ」

翔の目を真っ直ぐ見て、一言。

「うん。…どいて」

私と話そうともしない翔。やだ、絶対どかない。

「翔と話したいの。まだ一限目まで時間あるんだから、良いでしょ？」

ちよっと強気になってみる。いつも引いてるんだからちよっと位は押してみなきゃ！

「面倒い。話なんてする必要無いっしょ」

私の肩に手をかけ、退かそうとする。

「くっ。やめてよっ。私の話聞いてっば。屋上。行こ？」

危うく力に負けそうだったけど、渋々翔は屋上に行ってくれた。

「何」

明らかに機嫌が悪く、ムスツとしてくる。朝友達と話していた翔とは別人みたい。

「私、バカだから：翔がなんで怒ってるのかわかんないの。あたしなりに一所懸命考えて、考えたのに：」

翔の私を見る目は変わらない。

「だからっ、教えてほしいの！私が何をしたのか、翔は何に怒ってるのか：全部話して欲しいのっ」

お願い：気持ち、届いて。

あたしの必死の訴えが通じたのか、翔は軽く息を洩らし、

「わあったよ：。ったく、しょうがねえヤツ」

半分諦めたように、観念してくれた。

「お前さ、俺がなんでお前と付き合いたいと思ったかわかってる？」

：やだあ。

「それはあーその：あたしのことを、好きだから：でしょう？」

恥ずかしいなっ。なんでわざわざ言わせるのかな。

「ぶっ。違う違う」

おかしそうに笑う翔。

「紅さ、俺のこと好きだったろ。結構前から」

……え…？

「それ、なんとなくわかったから紅のこと見てたんだけど、一途そうだし、のんびりしてそうだから都合良いなって思ったんだよ」

都合……？

「えと：…どういうこと？」

「だから俺は、一途な子が良いと思ったわけで、他のヤツとデートとかするなら条件から外れるなっと思ったわけよ」

「ちょ：、ちょっと、待って？」

翔が私に好きだって言ってくれて、付き合うことになったけど、それは一途そうだからで、今の私は一途じゃない：ってこと？

「待って！私が誰とデートしたの？なんで一途じゃないの？」

私は翔が大好きで、ずっと追ってるのに。

私の言葉を聞くと、また翔は不機嫌になった。

「お前さー俺が嘘嫌いだって知ってんだろ？今更誤魔化すなよ。見

たんだから」

嘘？誤魔化す？見たって一体…。

「翔は何を見たの？私、誰かとデートなんてしてないよ。好きなのは翔だけだよ」

へっ、と口を歪めて吐き捨てたように言う。

「お前って相当の役者だな。人騙して楽しいか？なあ……ウザいんだけど」

ビクッ

ウザいだなんて初めて人に言われた。

なんでよりによって翔に言われなくちゃいけないの…？

「一体…翔は何を見たの？私わけがわかんない」

翔のオーラが怖い。空気がピリピリ張り詰める。

「お前が…夕方、学校帰りにデートしてんのをだよ。家にまで呼びやがって、今更しらばくれんなよな。お前がそんな態度ならどうでもいいわ。俺はお前のこと、なんとも思っていないし別れるよ。面倒いんだよ」

……学校帰り？家まで…。

「あぁっ！」

閃いた。というか、気付いたよ。

「それって俊ちゃんのこと?!」

絶対そうだよ！やっぱ翔の勘違いだったんだ。良かった。

「…俊ちゃん？」

戸惑いを隠せずにぽつりと口に出す翔。

「そうだよ。紅の幼なじみの俊ちゃん！生まれたときからずうっと一緒なの」

ただの勘違いで良かった。身に覚えがないから凄く焦ってたよ。

「じゃあ今まで、なんで俺に言わなかった？初耳だぜ、そんなヤツ」
まだ半信半疑といった感じ。

「小六の時にカナダに行っちゃって、最近帰って来たからだよ」

「あ……そう」

ほっとしたあ。

ちゃんと解決出来て良かったよ。翔はまだ、整理が出来ないみたいだけど大丈夫だよな。

キンコーン キンコーン

予鈴が鳴る。あと五分で授業が始まる。

「あっ戻らなきゃ。でも良かったあゝ誤解が解けて。今思ったけど、あの日紅の家の前にいた人って翔だったんだねっ」

人の気配を感じたのは間違いないかなきゃなかったんだ。

「ああ…。なあ、紅」

「うん？」

「俺がさっき言ったこと、気にしないで。ムカついて言ったただけだからさ」

さっき言ったこと？

たくさん話してたからどのことかわからないけど…。

「うん。じゃあ放課後迎えに行くねえー」

ほんわかと教室に戻る。良かった良かった。

あっちゃんと俊ちゃんに報告しなきゃ。それで、頑張ったねって褒めてもらうんだあ。

#10 考えたい

「それ……ホントに皆瀬に言われたの？」

「うん、そだよっ」

天気も良いし、久しぶりに中庭でお昼を食べることにした。それで、翔の話をし始めたところ。

「それさ……そんな簡単に流して良い話なの？だって、一途そうだから都合良いって思われてるんでしょ」

声に不安が滲出ている。そんなに、深く考えることなの……？

「でも、ムカついて言っちゃっただけだって言ってたし……」

“不安”が移ってくる。都合ってどんな都合か知らないけど、私は今まで翔の

「紅みたいな子が好きだから」

という言葉にだけ支えられて来たんだよ。

でも……“紅みたいな子”って、何。一途な、都合の良い子のことなの？

でもそしたら、一途なら誰でも良いみたいじゃん！

やだよだ、マイナス思考になっちゃってるよ。大丈夫、翔と私はラブなんだから……。

あ、でも、いまいち翔の考えがわかんないんだよね……。どうしょ……。

「紅？大丈夫？……ねえ、言いたかないんだけど、どこか無理があるんじゃないかな。紅と皆瀬って」

ギクッ……

胸が痛い。痛いところを突かれたって感じがする。

「その……、やめろ！とは言わないよ？紅だってちゃんと考えてるんだろうし、私が知らないこともたくさんあるんだろうから。だけだね……」

だけど、ともう一度小さく口の中で呟いてから、

「紅は、少なくとも今の紅は楽しそうじゃないよ。いつも、どんな

に辛いことあっても笑いながら解決して乗り越えてきたのに。すごく苦しそうに見える。そんな紅は、見てるのも悲しくなるよ…」
笑って…。ホントだ、笑ってない。口角が下がって、力を入れてもびくともしない…。

「あっちゃん…どうしよう。翔が好きなのに、考えると辛いよ。自分分は翔のことをなんにも分かってないのがわかるから…余計苦しいよ」

すぎるようにあっちゃんの膝に両手を置く。

「…ねえ、紅。少し距離を置いてみたら？俊君の誤解は解決してるんだから、紅に非はないし」

「距離を…置く…？」

今私から離れたら、もう翔は遠くに行っちゃうんじゃないかな。また

「面倒い」

って切り捨てられて終わっちゃうかもしれないよ…？

「やだよ、あっちゃん。それは怖いよ！翔がいなくなっちゃうもんやだ…また泣きそうになってる。もう涙目かもしれない。」

「離れて行くなら、皆瀬はいい加減な奴だったってことだよ。紅も追ってばっかじゃだめ。このままズルズル付き合ってたって良いことあるとは思えない？」

それは、私がしたくない一番のことだ。

こんな気持ちのまま付き合っても、きつといやな思いするだけだね…。

「わかった。今日一緒に帰るから、その時に言うね」

一回落ち着いて、ゆっくり考える。きっとそれが一番良いんだよね。

#10 考えたい（後書き）

このお話はあまり長くならないように展開を早くしていこうと思っています。読者の皆様、読んでくださって有り難うございます☆

#11 衝撃の味

「紅、おせーぞ。待たせんなよな」

放課後、授業の質問をし終った私が翔のクラスに行くと途端に翔が立ち上がり、

「行くぞ」

と私の頭を軽く叩きながら教室を出て行った。

「うん。ごめんね」

まだ翔の感触が残っている頭を触りながら、翔を追い掛ける。

言わなきゃ。

言わなきゃ…。

ちよつと、距離を置いてみたいの、って。

すう…：はあゝ

翔に追い付いてから、深呼吸。

「何、気合い入れてんの？」

横目で私を見て、軽く笑う翔。

この笑顔が、あたしの好きな笑顔で、翔がよくするイタズラな笑顔。

「気合い…：。うんっ、そだね」

うおっし、ここは女らしく、ばちっと決めなきゃだよ…。

「気合い入ってる紅なんて見たこたねーな。体育祭の時の空回りなら何度もあるけど」

そんな楽しそうに笑わないでよ…。今からあたしは、一大決心を伝えるんだから。

「し…翔？」

「あ？」

私の雰囲気気付かないのかな。結構ピシッとしてるつもりだよ。

「あのね、えっと…：なんか、ね…」

しどろもどろになっちゃうよ！

でもここではっきり言わなきゃ何も変わらないし、良いことなんて

ない。

「少し：距離を置いてみたいの」
言ったよ…。

チラッと翔の様子を伺う。

表情のない顔……。

ほんとは何か考えてるのかもしれないけど、今の私じゃわからないよ。

鈍い私が大嫌い。

もっと皆の気持ちをわかりたいのに、気付けなくて、人に助けも
らってばかりで…。

そう、自分のことがいやだから、これ以上翔と居られるのか不安な
んだ。

だからまず、自分から離れてみたいの。

「……なあ」

私から顔を反らし、呟くように喋る翔。

「お前、俺を嫌いになった？」

「そんなわけないじゃんっ。私はずっと…っ」

翔のことが好き。

でも…でも、上手くやってけるかわかんないの。

今まで二年間付き合ってたのに、相手の気持ちが読めないってど
うなの？

有り余る程の“大好き”を持っているのに、どうして…。

「じゃあなんでだよ。俺が朝言ったことは気にすんなって言わなか
ったっけ？」

苛々した空気が伝わってくる。なんで怒るの。私は悪いことなんて
してないよ。

「朝のこと、最初は深く考えなかったけど、都合が良いとかってお
かしいと思うし：結構シヨックだった」
はああー

とても面倒臭そうに大きな溜め息をつく翔。

「わあったよ、面倒なヤツ。距離置きたいって？好きなだけ置きや
あ良いだろ」

……良かった、のかな？

「うん、じゃあ……」

バイバイって言おうとした私を、突然遮る声が聞こえてきた。

「みーいー？帰るのか？俺、今からそっち行くとこだった！」
明るい男の子の声。俊ちゃんだっ。

「俊ちゃん、ちょっと待ってて！」

思わず笑顔になった後で、翔の方を見る。

「何：アイツが“俊ちゃん”？」

「そうだよ……？」

どうしたの、翔。もっと苛ついてるように見えるけど。

「よっ。……あっ、ごめん！紅一人かと思った」

坂の上からゆっくり降りて来た俊ちゃんは、翔がいることにすごく
びっくりしてる。

「どーも」

不敵な笑みを浮かべ、翔が挨拶する。

「ごめんね俊ちゃん、ちょっと待ってて。今翔と話してるから……」
翔の様子が明らかにおかしい。

俊ちゃんは別になんとも思っていないみたいだけど、邪魔をしたと思
ったらしく慌てて、

「じゃあ先行ってるわ。お邪魔してすみませんでした」
また明るく去って行こうとした。

「待てよ、“俊ちゃん”。紅の幼馴染みだって？」

口の歪みを治さず、俊ちゃんに話しかける翔。

私は……見たことのない翔の黒いオーラにぞっとしてる。

「ああ、一応な。ごめん、俺行くから。邪魔して悪かったな」

俊ちゃんは友達に接するようにしてる。

「ああ……またなにやっ

また変な笑い方をする翔。

私は：見たことのない翔の黒いオーラにぞっとしてる。

「ああ、一応な。ごめん、俺行くから。邪魔して悪かったな」
俊ちゃんは友達に接するようにしてる。

「ああ：またな」

にやっ

また変な笑い方をする翔。怖いな：どうしちゃったんだろ。

「ん、じゃな」

俊ちゃんは私の家に向かって行った。

「紅」

「っ、はいっ」

なんだか慌てちゃう。雰囲気が恐ろしい感じ…。

「俺、お前と別れない。あくまでも距離を置いただけだから。いつでも戻って来て良いぜ」

翔が居場所を残しておいてくれるのはすごく嬉しい。

まさかこんなこと、言ってくれるとは思わなかったよ。

「うんわかった。ありがとう」

ぎこちなく笑顔を作って、今度こそさよならを言おうとした。
ぐいっ

翔が物凄い力で、私の腕を掴み、そのまま自分の方に抱き寄せる。

強く、激しいキスをしてくる。

何？

なんなの…？

いきなりでよくわからなかった。わかるのは、今も唇を覆われているってことだけ。

ちよっと…待ってよっ。

こんな痛いキスなんてしたことない。というか、しようもしなかったのに。

体を引きはがそうとしても、力が強くてびくともしない。

何分経ったろう…。

ゆっくりと翔が口を離す。

「んっ…」

はぁ…はぁ…

息が乱れる。苦しかった。

「紅、忘れんなよ」

「…え？」

まだ整わない呼吸をしながら、翔を見る。
翔の顔が右の耳元に近付く。

「お前は、俺のモノだからな」

#11 衝撃の味（後書き）

皆様、ここまで読んでくださって有り難うございます。評価やメッセージも頂けて喜びまくっています。よく頂くのは「少女漫画っぽい」ですねf^_^;確かにこのお話は、漫画のような雰囲気を持たせたいと思っているので、皆さんに伝わって良かったと思います。それと、主人公・紅の性格についてはまず、「鈍感」の一本につきます。（笑）色々考えているのに空回り、全く逆の結末を生んでしまうようなタイプ。天真爛漫でポジティブなので、周りに悪い人なんていないと思っているんですよ。受け入れられない人も、現実にいるのがね。六割程、紅と作者の性格がかぶっていたりもします（残念ながら…）。世間知らずな作者ですが、今後とも宜しくお願い致します。評価のお返事、出来るものはしていきたいと思っています☆

#12 放心状態

「おかえり、紅」

少し戸惑い、放心状態の私に優しく微笑む俊ちゃん。
心に染み入る暖かい笑顔…。

「ただいま」

にこって、こっちまで笑顔になる。

「お婆さん、夕飯の買い忘れあったらしくて急いで出てったよ」

「そっかあ…。ママよくやるんだよー、忘れっぽいの」

あたしの言葉を聞くと、俊ちゃんは笑いながら、

「みいが言える立場じゃないだろ。ほんと似てるな、お婆さんと」

「そっかなっ。よく言われるけど、自分じゃわからないんだよねー」

「…：紅、なんかあった？　そういや今、彼氏といたみたいだけど、
仲直り出来た？」

何を感じ取ったのか、いきなり心配そうな顔をする俊ちゃん。この
顔またさせちゃったよ。

「仲直りはしたけど…：距離を置いてみることになったの」

そう。でも翔は別れるわけじゃないって、私に…：。

ボツ

顔が赤くなってるのがわかる。翔に対して、どんな態度すれば良い
のか困る…。でも流石にこの話を俊ちゃんにするのは恥ずかし過ぎ
るよ。

「どした、なんかされた？」

俊ちゃんの言う“なんか”が、一体どんなことを指してるかは色々
ありすぎてわかんないけど、これは言えない…。

「ううん、なんにもないよ。でも距離を置くって感覚がわかんない
から戸惑ってはいるんだけどね。俊ちゃん、紅、着替えてくるね」

ぱたん…

少し湿度のある、暗い自分の部屋。ベッドに腰を掛けて、ほーっと溜め息をつく。

「距離を置く…かあ」

置いたって翔は待っていてくれるんだよね？なら、じっくり考えてみれば良いんだ…。翔が離れてしまう心配はなくなったんだもんね。でも、何を考えれば良いんだろ。

翔があたしを都合が良いとか言ったのが気になったけど、翔はあたしから離れようとしなかったわけだし…。ってことは、やっぱりあたしのことをちゃんと好きでいてくれてるってことだよな！

問題は、あたしが自分に自信がないことや相手の気持ちを分かることが出来ないこと、だよな。

じゃあ…明日から、学校で客観的に翔のことを見てみよう。

そしたら何かわかるかも。

紅にしては良い考えだよなっ、冴えてる。

「紅ー？ご飯よ！」

階段の下から、ママの声が聞こえてくる。

「はあい！」

ちよっとスッキリしたからお腹ぺこぺこ。俊ちゃんも来てるしたくさん食べよっと。

「うっわあゝ良い匂い！」

鰯のフライだあ☆

このソースがまた、美味しいんだよね…。衣はサクサクだし、感激。

「おいしい〜」

食べてると幸せになれるって本当だなあ。これで明日からも元気に頑張れるんだよね。

ママに感謝だよ。

そんなこんなで食べ物に夢中になっていたから、俊ちゃんがじっと

紅のことを観察してたことに気付かなかったんだよね…。

#12 放心状態（後書き）

そろそろクライマックスに近づけると良いな、なんて思っています。このお話はあまり長くしたくないと考えているので…。ここまで読んでくださった皆様、有り難う御座います。感想やアドバイスなど頂けたら参考にしますので、是非よろしくお願いします。

#13 嫉妬心？

「あっちゃん、ちゃんと距離を置くことになったよ」
あたしなりの真剣な顔をして、あっちゃんに伝える。

「ほんとお。よく言えたね、頑張ったじゃん」
あっちゃんは笑って、褒めてくれる。

嬉しいにゃんっ。……なんてね。

「で、皆瀬はどうだった？ 素っ気ない感じだった？」

「ううん、絶対別れないからな、って言ってくれたっ」

そう、翔と紅の絆はこれからも続くってこと。

「え…あの皆瀬が？ また解釈間違えたんじゃない？ おかしいよ」
不安げなあっちゃん。

「大丈夫。態度で示されたから」

ほう…

吐息を溢す。頭から焼き付いて離れないよ。やだ！ 恥ずかしいっ。

「なんかされたの？」

いぶかしげな表情で紅を見るあっちゃん。

「それ、昨日俊ちゃんにも言われた」

あたしは笑いながら、昨日のことをあっちゃんに話した。もちろん、あのキスのことは恥ずかしすぎて言わなかったけど。

「…つまり、それは、俊ちゃんを見て態度が豹変したって感じですよ」

…ええ？

「どうして俊ちゃんが関係あるの。ただの幼なじみなのに…」
なんだろう。あっちゃんはあたしの話を聞いただけで、何かを感じ取ったの？

「んー、まずね、“ただの幼なじみ”って思ってるのは紅の他に誰がいるのかってこと」

「言ってることがよく分かんないけど、それは翔も俊ちゃんも、も

「ろんあっちゃんもでしょ？」

あっちゃんは軽く溜め息を付き、

「私はね…、他の人はそうでもないと思うな。少なくとも皆瀬は。だって、明らかに敵意剥き出しじゃない。『お前には渡さねえぞ』って、語ってる」

敵意剥き出し?! にやにやしてはいたけど、でも…。

「それで、紅の気持ちを離さない為に『俺のもんだ』なんて言ったのよ。まあ、自分に自信が無いと出来ないね」

そんな、深い意味があったのかな…。その場にいたあたしは何も分かんなかったのに、どうしてあっちゃんは分かるの？

「凄いいね、あっちゃん。なんかカッコイイ」

尊敬の眼差しであっちゃんを見る。

「そう? ま、紅が皆瀬のことを本気で好きなら俊ちゃんの登場は良い事だったんでしょね。そのお陰でヤキモチ妬いてくれてるんだから」

「ヤキモチ?!」

やだあ、そんな可愛いことを翔がしてくれるなんて…。

あっちゃんの推理が当たっていると良いな。

「そっかあ…そうなのかな…。嬉しいな…」

考えていると、だんだんと自然に顔がにやけてくる。

「紅、だらしのない顔してる。このチャンスものにする為に、しっかりしなきゃ!」

あっちゃんが喝を入れてくれる。

「うんっ。有り難う、紅頑張るよ!」

あたし、絶対に翔と通じあえる女になる。

そしたらきつと、翔からあたしに何か行動を起こしてくれるから…。

#13 嫉妬心? (後書き)

なんだか雲行きが変わって来ましたね。翔の本心はどうなんでしょう。皆様、メッセージやアドバイスなどありましたら、よろしくお願い致します☆

#14 新たな風

「紅、寝癖付いてる」

朝、途中まで一緒に行こうと家の前まで来てくれた俊ちゃん。

おはようを言う前に髪のことを言われたのは恥ずかしいけど、誰かと朝歩くことはあまりしたことがなかったから、嬉しい。

「あのさ、みい」

「うん？」

一旦家に戻って、スタイリング剤とヘアアイロンを持ちながら鏡と睨めっこしてる紅の横で、俊ちゃんが意を決した様子で話しかけてきた。

「紅さ、最近様子おかしいよな。一喜一憂したり…。気持ちの浮き沈みが激しくないか？大丈夫か？」

そんな心配をされてるなんて、少しも思わなかった。

「紅は元気だよ。そんなに心配しないでっ」

笑ってみせる。だって本当に元気だから。

「本当に？俺、紅のこと見てたけど…何かが変だよ。翔って彼氏になんかされたんじゃないのか？」

必死に言ってくる。目が、あたしに、“本当のことを言ってくれ”って語ってる。

「えっと…。確かにごちゃごちゃしてたけど、もうすぐ解決するか！だから紅、元気なんだよ」

「……わかった。いきなりごめん」

俊ちゃんはバツが悪そうに苦笑い。

「ううん、心配してくれるのは嬉しいよ！でも平気だからね、あんまり気にし過ぎないで」

俊ちゃんに心配ばっかかけてちゃいけないもん。

あたしはもう高校生なんだから、こんなじゃないの。

寝癖はなんとか収まって、俊ちゃんとあたしは途中まで一緒に歩いた。

少し沈黙が起きたこともあったけど、普通に話せた。

「おはよう！」

あっちゃんは弓道部の朝練で早くに来ていたらしく、教室で他の友達と喋っていた。

「ああ、紅おはよ。いつもより遅くない？」

あたしはいつもホームルームの始まる十五分前くらいに着いているから。

「うん、寝癖がガンコだったのー。戦ってたよっ」

「ははっ、そっか」

あっちゃんは柔らかな笑顔を向けてくれる。可愛い。

身長が一六七センチあるあっちゃんは、胸くらいまでの長くサラサラな髪をしていて、遠くから見てもすごくきれいなオーラが出てる。

和風な雰囲気をかもしだしてるけど、目は大きな二重で可愛い感じなの。

紅も、これくらいスタイルが良かったらなあ〜って憧れてる。

「ねえ、あきこ。体育でバスケのチーム分けしなきゃなんだけど、一緒に考えてくれない？」

クラスの子、あずさちゃんがあっちゃんに話し掛ける。

元々リーダー郭でもあるあっちゃんは、皆の人気者。

最近相談ばっかしてたから忘れてたけど、本当に素敵な子なんだよ。あたしもちゃんと周りを見て、雰囲気読める子にならなきゃ。

ぐるうりと周りを見てみる。

あ！翔だっ。廊下に翔がいる…。髪の色がもっと抜けたみたい。隣には可愛い女の子…。すごく仲良さそうだよ?? 友達かなあ。

まあ、今日は運勢が良いって占いに書いてあったし、きっと良いことがあるよ！

「あのう……。斎藤さんいますかあ？」

お昼休みにあたしのところに可愛い女の子がやってきた。

多分隣のクラスの相葉さんで：朝、翔と喋ってた子。

身長は紅と同じくらいで百五十センチあるかないかくらい。

目はパッチリ大きい。

しかもお化粧してるから、可愛いのに綺麗な色気も持っていて、そういう部分は紅と正反対だなあ。

「えっと、なあに？」

一度も話したことないよ。よく見掛けてはいるけど。

「ちよっとお話があるからあ、来てもらっても大丈夫う？」

鼻にかかった、皆がよくやる喋り方。声が高くて可愛い。

「うんっ、良いよお」

お話って何かな。いきなしだから、想像も出来ない。

「あっちゃん、ちよっと行って来るね」

窓側の自分の机に座って、友達に囲まれているあっちゃん。

「わかった！次、講義だから一応席取っとくね」

講義は月に一回だけ、大学の教授とか有名人なんかを招いて行われる。

今日は心理カウンセラーさんだから、ずっと楽しみにしてたんだ！

「ありがとっ」

古くなった第一体育館の裏。どうしてこんな暗い場所でお話するのかな。

「あのね、斎藤さん。櫻、翔クンのこと大好きなのねえー」

相葉 櫻。そういえばこんな名前だったなあ。

って…。

「えっ、そうなんだ」

翔はモテるから…。

「うん、そおなんだあ☆」

相葉櫻ちゃんは、笑顔。

でも目は笑ってないよ…。

微笑んではいるけど、あたしを上から見てるような威圧感がある。

「えーと…」

怖いから怒らせたくないな。言葉を慎重に選ばなきゃ。

「それで？」

ピキッ

相葉櫻ちゃんの瞳が、強い光を持ったように見える。

言葉を少なく、選んだつもりだったのに…失敗しちゃったかな。

「斎藤さんはあ、今彼女じゃないんだよねえ？」

まだ笑顔を崩さず、右手を軽く顎に当てて、訊いてくる。

「付き合ってるけど、今距離を置いてもらってるの。もうすぐ普通になるよ？」

取らないでっ。ちよつとの間だけなんだから…。

「じゃあ、今は付き合っていないよねえ？」

「…：うん」

付き合っていないのかな…：分かんないよ。

「うん☆それ聞いて安心しちゃったあ。ありがとねえ」

甘い声。そして、強気なオーラ。背が小さいからって可愛いだけじゃないんだ。パワーに満ち溢れてるよ。

「斎藤さん。櫻、今日翔クンと帰るけど気にしないでねえ」

くすつと笑って、ふわふわと天使のように帰って行った。

…：待って。

今日は、

水曜日だよ…？

#14 新たな風（後書き）

タイトルに使う『風』。良いイメージを持っているのに、何故か悪いときに使ってしまう。評価やアドバイスなど、何かありましたらよろしくお願いします。応援してくださる皆様、有り難うございます！

#15 深い友情

相葉櫻ちゃん——中学生時代はバトントワリング部に入部していて、小悪魔的な魅力があり男子から人気があったらしい。後輩の女子を呼び出して脅したり（

「アンタでしゃばってんじゃないわよ！」

みたいな）、クラスの大人しい子をいじめる首謀者だったりしたらしい…。

「有名な話なの？」

その話を教えてくれたあっちゃんに尋ねる。

「うーん、一部ではね。私達には関係無いと思ってたけど…そうか、皆瀬に来たか」

来たよお…。

あたしに、そんな強い子と闘えるのかな。

イジメなんて全く関わったことない、対極にいるあたしに…。

「今は帰宅部で大人しく可愛い子やってるみたいだから、強固な態度には出られないと思うよ。取り敢えず、本当に今日、二人が一緒に帰るのか見てみなきゃ」

「そうだね…」

あっちゃんは、ふっと笑って、

「そんな心配しない。皆瀬が言った言葉忘れたの？それに、櫻っ子は本質的に中学生のときのままだろうけど、紅には強い味方がいるでしょ？」

味方…。

ぱっと目を上げる。自信に満ちたあっちゃんの笑顔。

ほんとにほんとに、力強い！あっちゃんがいなかったら、きっと不安で押し潰されてたと思う。

友達って本当に良いもんだね…。

「一人でも、信じ合える友達がいるということは、それだけで強い精神的支えになるんです。それは皆さんも身を持って感じている筈。友達じゃなくなたって、なんでも話すことの出来る人がいればそれが心の拠となるのです。もし、今、そんな人に出会っていないかったとしたら、私どもに電話したり、クリニックスに来てみてください。どんな些細なことでも、臃な不安でも、思ったことを話すだけで良いんです。最近は一……」

心理カウンセラーの林 梨佳さんは、こんなこと言ってた。あたし、この人の占い本をたくさん持つてるの。

最近また懲り出したんだ。占いとか心理テストとか大好き。翔にもこんな話をしたことがあったけど、くだらないって笑われちゃったっけなあ…。

#16 待ち伏せ

「紅、そこからじゃなんも見えないでしょ」

窓辺に立って校門の方を見ていたあっちゃんが、振り向いて私の方を見る。

――黒板に頭を伏せて、うつ向きながら立っている私に。

「あああ……そうだね、見なきゃっ。尾行しなきゃ……」

顔半分は黒板に伏せながら、左目だけであっちゃんを見る。

あっちゃんがいることは大きな支え。

だけど怖いことは怖いんだ。きっと今の目は恐怖でいっぱいなの……。

「だからって私が見ても意味ないでしょ。紅の問題なんだから。

頼るのと甘えんのは別物だよ」

本当だ……私、あっちゃんに甘えてるだけだ。

あたしの問題なんだから、もっと責任持たなきゃ。

「ごめんね、あっちゃん。私やるよ！」

ふんつと鼻息を鳴らす。

「うん、その息！あ、でも……尾行なんてしちゃだめよ。紅は下手そ

うだからストーカーになりそう」

笑いながら冗談を言うあっちゃん。大好き！

「わかった！」

窓に駆け寄り、あっちゃんの手を軽く握る。

二人で顔を見合わせて笑顔。

怖いけど立ち向かってやる！

「……うわあっ」

タイミングを見計らったように、翔と櫻ちゃんが校舎から出て来た。

「紅……」

ただ私の名前を呼んだだけみたいで、あっちゃんがぽつりと言う。

櫻ちゃんが、笑いながら軽く翔の背中を叩く。

翔はいきなり足早になり、櫻ちゃんが翔のシャツの袖をつんと引っ

張り、追い掛ける。振り返る翔は――笑顔…。

「相葉櫻、流石だね。ボディタッチのテクが半端ないよ」

テ…テクですか。

私、啞然。

「あの、つんって引っ張られるとドキッとするらしいよ。私は逆に男子にやられたことあるけど、確かに効くと思った」

「……あっちゃん、男子につんってやられたの？」

ちよっと気になる。

「あつ、ただの友達だけだね。おい、って感じで引っ張られただけ」慌てたように説明するあっちゃん。

なんとなく納得いかないあたしがあっちゃんを見ていると、

「ほらっ。今は私のことじゃなくて皆瀬でしょ！」

と、主旨を思い出させてくれた。

あの二人は仲良く校門を出て行きましたよ…。

「どーしたい？」

あっちゃんが優しく尋ねてくれる。

「あたし…翔が大好きだもん！どんなに、気持ちに通じなくなっても、翔は待ってるって言ってくれたし…」

通じ合えないことは、とてつもなく不安。

でもでも、翔がいなくなっちゃうことが、何よりも怖いことだよ。

明日直接言う。

距離を戻そうってことを。

そして、訊く。

水曜日は何をやっているのか、そして――翔が私のことをどう思っているのか。

#16 待ち伏せ（後書き）

後数回で最終回です。次か、その次か…。
最後までお付き合い頂けると、嬉しいこと限りなしです。

#17 屋上対談

「…っ、翔！」

次の日、いつかのように翔を教室の前で待ち伏せた。

「ああ、紅。何ピリピリしてんだ？」

登校して来た翔の隣には、櫻ちゃん。

朝からなんで一緒にいるのよ。

「やだあ、斎藤さんって怖いんだあ…。翔くん、櫻ビックリしちゃったよお」

翔のワイシャツの袖をきゅっと抓む櫻ちゃん。

もうっ、馴れ馴れしくしないで欲しいよ…。

「翔、お話があるの。ちよつと来て」

櫻ちゃんを見ないように、翔の目を見つめる。

「…ん、わかった。じゃあなー相葉」

「えっ？ 櫻だよお！」

今度は本当にビックリしたようで、名前で呼ぶように訂正させようとする櫻ちゃん。

翔はあまり気にしないで、あたしを見て、

「行くぞ」

とせつつく。

何か違和感があるんだけど……ん？

「お話ってなんですかー」

屋上の手摺にもたれかかり、あたしを見る。

風にさやさやとなびく髪がかっこいい。

「うん…いくつか訊きたいことがあるの」

おずおずときりだすあたしに、

「なんだ」

とつまらなそうに言う。

「まず、水曜日にいつも早く帰るけど、何をしてるの？」

前から気になっていたことだもん。

「ああ……それは、ちょっとな」

「え……言えないの？」

「うん、悪いけど」

ごめんな、と呟いて、

「質問はそれだけ？」

と終ろうとする。

「あつ、まだ！あのね、翔は私のことをどう思ってる……？付き合うときは、私みたいな子が好きだって言ってくれただけで、よくわかんなかった」

ドキドキ

これには答えてくれるかな……。

「知りたい？」

「もちろん！」

即座に答える。

「可愛いと思うけど」

きゃ……。か、わ、い、い……？

頭の中でもう一度再生する。

「それと、ちっこいと思う」

可愛いなんて言われたのは初めて。ちっこいのは自覚済みだけど。

「……それだけ？」

そういう見た目の話じゃなくって心の話を聞きたいのだけ。

「お前……欲張りだろ」

欲張り……。翔の口から可愛いなんて言葉が出て来るだけで素晴らしきことなのに、先を望む私はそうなのかな。

「うん……ごめんね？」

ご機嫌を伺いながら、そっと謝る。

「別に良いけど。ぶっちゃけるとー、好きだよ、ちゃんと」
！！

「ほっ、ほん…」

“ 本当？ ”

そう訊きたいんだけど、ストレートに言ってくれるとは思わなかったから…正直、慌ててる。

「本当だよ」

ふっ、と笑って頭をぽんぽんと軽く叩いてくれる。

「あっ…でも…。それでも、水曜日に何をやってるかは教えてくれないの？」

好きなのに…？

「好きなヤツにこそ言えないことってあんじゃん。それは理解しろ…出来ません。」

「わかんないよ。大切なことなの？ 昨日の水曜日は櫻ちゃんと帰ってたのに、私とは帰らないじゃない…」

大切なことなら余計、なんで櫻ちゃんと帰ったのか気になる。

翔が好きって、はっきり伝えてくれたのに、それだけじゃ満足出来ないでいる自分が怖い。

いつから私、こんなに図々しくなった？

「ああ、そういうや昨日、二階の窓から見てたよな」

「気付いてたの？」

「そりゃあもちろん」

気付かれていたんだ…。私が震える思いで見てたことを知ってたんだ…。

「ねえ…翔の“ちゃんと好き”ってどういうこと？ 私今日、距離を置くのをやめようって言おうと思ってたんだけど…」

また分かんなくなってきた。

「ごめん、放課後に話そ」

もうすぐ始業ベルが鳴るから、私はそう伝え、屋上から立ち去ろうと踵を返した。

#17 屋上対談（後書き）

次でラストです。張り切って書いてます。大分、色んな人の本心がわかってきたと思います。種明かしは面白いです。応援よろしくお願いします。ここまで読んでくださった皆様、もう少し最後に最後まで読んでみちゃってください☆笑

#18 好きな人

「おいっ、待てよ！」

慌てたように、翔が後ろを向いたあたしの右手首を掴む。

「まだ話、終わってねーんだけど」

強い意思を持った、光のある瞳。

「や…でも、鐘鳴っちゃうよ」

後一分もないよ。遅刻付いちゃうじゃん。

「欠課一つくらい付いたって変わんねえよ。話のが大事だろ」

翔の力が強いから一歩も動けない。

欠課ってことは、休むの決定なのね…。

「――わかった」

貴方は今何を考えている？何を思っているの…？全部知りたい。

「好きなヤツにはさ、少しでもかっこいいーとか思われたいんだって」

「……？翔はかっこいいよ？」

素直に色々話してくれる翔はとても新鮮。嬉しいけど…何がいきなり翔を変えたの？

「だからさ…。お前には、疲れた俺とか、情けないところが見られたくないし…常に優位に立ってたいんだって。言わなくてもそんなに分かりかって」

…なんにも分かってなかったよ、あたし…。

翔があたしのことを、そんなに思う程好きでいてくれたなんて。

「でもっ…」

でも…ね。

「あたしは、どんな翔でも好きだよ。弱音吐いた翔だって、後…おバカな翔とかだって、知りたい。見てみたいよ」

翔が、あたしを見る。

無表情なままで…。

……………あれ？

だんだん気持ち伝わってくる。

“お前、本当に最高だよ”。

ふっと翔の顔が和らいで、笑顔になる。

あたしの大好きな――悪戯な笑顔。

「見てみたいんだ？」

笑顔のままで訊いてくる。

「うん、見たいっ」

「わかった：じゃあ、水曜のこと教えてやるよ」

ドキッ

胸の鼓動が早くなる。

「俺は先週まで、心理テストを教わったり、相手の行動から人の心を読むことを学ぶ為に心理教室に行っていました」

…心理…？

ってゆうかそれって…！

「翔がバカにした、あたしの好きなことじゃない?!」

なんでバカにしたの？照れ隠し…？

「そうだよ、お前がハマってるとか言うから…しっかり学んでやったんだよ」

「ってことは、あたしの話を聞いてから通い始めたの？」

待って、それじゃあ、紅のために大切な時間を割いて心理の勉強してくれてたの？

「俺自身不思議だったよ。紅に通わせれば済むことなのに、隠れて俺がやるなんてさ」

少しバツが悪そうに苦笑する翔。

「まあ、実際面白かったし。雑誌に占い載せてる先生だったから興味深い話も聞けたしな」

紅はすぐに飽きて、最近また再熱したくらいのいい加減なものなのに、翔はずっと通っていたんだ…。

「紅…知らなかったよ…」

嬉しすぎて泣きそう。翔の愛は深いよ。

「知られてたまるかよ。紅には、しっかりと惚れてることを気付か
れたくなかったから、気持ちが通じないように頑張ってた」

翔が意図的に通じ合わないようにしてたの？

「あたし…悩んでたのに」

「あ？」

「だから…。翔の気持ちが分かんないって、ずっと悩んでたんだっ
てば」

正直に伝える。

「そうだったのか、悪かったな。でも今は分かるだろ」
うん…。痛い程分かる。心に染みるよ。

「大好きって、思ってる？」

「当たり前」

ぽんぽんって、紅の頭を叩いてくれる。

「翔はどうしていきなり、本当のことを話そうって思ったの？」

「紅が本当に離れちゃいそうだったから」

（――幼馴染みの俊ちゃんも、気に食わなかったしな…。ま、紅に
は言わないでおくか）

「じゃあ櫻ちゃんのお陰でもあるね」

「櫻って…相葉？」

「うん。櫻ちゃんが翔に近づかなきゃ、行動起こせてなかったかも」
翔は櫻ちゃんのこと、なんとも思っていないみたいで良かった。

「ふーん…。お前もライバルによって、か」

「ん？意味分かんなかった」

「今のはわざと分かんないように言った。気にすんな」

「…またあ？」

秘密はなしで行こうよ、翔。

「…後二十分授業あるけど出るか？」

唐突に話を変えてくる。

「いいよ、もう。今は幸せを味わいたいもん」
違うクラスだからきっと目立たないし。

「紅も悪くなつたじゃん」

からかう翔の声が耳元で聞こえる。

「そりゃあ、翔といたら……っ」

……。

……。

……。

「はいっ、頂き」

「ちよっとお……」

きつと翔はいきなりキスをするのが好きなんだ。

あたしはこう、ムードのある中でしたいのに……なんて、ね。
考えてて恥ずかしくなっちゃった。

「紅、頭ん中透けてるけど？」

「えっ」

にやっと笑った翔が、私を優しく抱き寄せる。

温かい翔の胸は一番安心出来る場所。

そっと私の顔を上げて、顎を支え優しくキスをする。

学校のチャイムがまるで、教会の鐘の音のように聞こえる。

お互いに相手のことが大好きで、だからこそ変なプライドを持ったり、悩みすぎたりしてしまっただね。

素直に相手を思いやる気持ちがあれば、思いは通じ合うことが出来るんだね。

皆瀬翔は、斎藤紅の好きな人です。

#18 好きな人（後書き）

完結しました☆：が、サイドストーリーとして、主人公・斎藤紅以外の物語をちょこ書いていこうと思います。見掛けたら見てやってくれると嬉しいです（ハ－ハ）Vそれと、感想や評価、アドバイスなどお待ちしております。そんな言葉達を受けて次に繋げたいと思います。では、これからもよろしく願います。有り難うございました！

＋1 俊ちゃん（前書き）

本編で置いてきぼりをくらった俊の、その後です。

＋1 俊ちゃん

「俊ちゃんっ、チケット買ってえーお願い！」

ドタバタと部屋に飛込んで来る紅。

俺は机に向かって英語の宿題をしているところだった。

「…なんの？」

和訳を最後まで書き終ってから後ろを振り向く。

「これっ。遊園地」

ピラッと自慢げに封筒からチケットを出し、見せびらかす。

「欲しいでしょー。欲しいよねえー？」

にやにや笑いながら、俺の言葉を待つ。

「いくら？」

「えっ、買ってくれるのっ？」

値段を訊いただけなのに、話を早く進めようとする。まるで悪徳商法だ。

「値段訊いてるだけ。何人分？」

遊園地なんて大勢で行かなきゃつまらない。

「んーと、定価は一人二千円だけど千五百円で良いよ。二人分ありますっ」

値段は良いとして…。

「二人？やだよ、行くヤツいない。紅が彼氏と行けば？」

紅には翔って彼氏がいて、いざこざがあったものの最近よりを戻したらしい。

だから、最近はのろけ話ばっかで飽々してる。

ずっと俺が紅のことを好きだった、なんて知らないからなんだけどさ。

俺も言う勇氣なかったし…元々立ち入る隙間はなかったみたいだしな。

今じゃもう、二人の恋を見守ろうと切り換えた。

「最初は翔と行くハズだったんだけど、遠いからやだってだだこねて、お台場に行くことになったの。かかる時間はあんま変わんないのにね」

にこにこ笑いながら嬉しそうに喋る紅。

この顔の紅が見れるならどんなのろけてくれ。辛そうな顔なんて二度と見たくない。

「――で、余ったから売りつけると？」

「えへー。まっ幼馴染みですし！」

小型犬のようにくりくりした目で見つめてくる。

「分かったよ、買ってやる」

「やったあ！ありがとっ。三千円でございませす」

両手を差し出してくる。観念したよ。

「ほら」

お札を三枚乗せる。誰と行くあてもないのに、とんだお人好しだよ。

自分に対して苦笑する俺。

「毎度☆じゃあ紅は帰ります」

任務を果たしたとでもいうのか、素早く立ち上がってさっさと帰って行った。

勉強するか…。

チケットは鞆にねじこんで、中断していた宿題を再開する。

誰と行こうか、それとも誰かに売りつけてしまおうか、と頭を悩ませながら。

これからも紅には振り回されそうだ。

Fin.

＋1 俊ちゃん（後書き）

俊はとても性格が良いので、新しい誰かとくっつけてあげたい気もしたのですがやめました。彼らしい気もしますので…。

これから

「見て、キレイ……っ」

「紅の方がキレイだよ」

「だっ……」

夜空に華やかに、そして儚く散る花を見るバカップル。

ありきたりな場所でありきたりな台詞を吐き、ありきたりに顔を赤らめキスをする。

何年も付き合ってきた、こんなにラブラブなのは初めてのこと。だから余計——タチが悪かったりもする。

二人の世界に浸りきり、周りが見えなくなっているんだから。

浴衣でカラコロ夜道を歩き、手をきゅっ握る。

二人共幸せが嬉しくて、ちょっと怖くて想いを繋いだ手に込めるんだ。

「今日……楽しかったね」

心地良い静寂を破る必要はなかったのだけれど、ふと相手の声を聞きたくなって話しかける。

「何、まだ今日は終わらないけど？」

にやりとイタズラっ子のように笑い、相手の表情を見る。

「なんで？ 後三時間で今日は終わるよ」

携帯電話の時計を見て確認する。

「まだ三時間ある。今日は両親ともいないからウチにおいで」

語尾に小さくハートマークを付けてじっと相手の目を見つめる。

「え？ こんな遅くに……」

「いいじゃん、変なことはしない。多分」

「たぶん……」

最後のさりげなくも重要な言葉を頭の中で繰り返し、
「帰るよ」

と申し訳なさそうに伝える。

「だろうな、分かっている。いつかは……な？」

少し真剣に瞳に語りかける。真っ直ぐな視線には敵わない。

「……いつかは、だよ？」

高校生にはまだ早いと考えている彼女は、その部分だけは難くない。
だ。

「はい、気長に待ちますよ」

またきゅっと手を握りなおし、再びゆっくり歩き出す。

カラコロ、カラコロ、のんびりと。

大丈夫。二人の気持ちは繋がっているんだから――。

これからも（後書き）

終わりです。エピソードのようなつもりで仲の良い紅と翔を書きました。最後は敢えて、あまりお互いに名前を呼ばせないようにしてみました。

紅も翔も俊も櫻も、皆大切な子たちです。応援してくださいました皆様には感謝しまくります。この作品を読んでくださって本当に、本当に有り難うございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1176a/>

だけど好きな人

2010年12月30日07時28分発行